

「日本の課題」

東京内科医会創立 20 周年記念誌 講演録

20 周年、おめでとうございます。このような機会に呼んでいただきましてありがとうございます。川上会長、それから神津会長とも長いおつき合いがありまして、内科学会と臨床内科医会が医学の進歩、医療の実践という内科医という立場で一緒に手をつないでやってきたわけです。

リーダーの問題

今日お手元に二つコピーを差し上げています。一つは、猿田先生が内科学会の会頭をされたときに、特別講演でしゃべらせていただいたものです。

もう一つは、JR 東海の「WEDGE」という新幹線の車内誌の「読書漫遊」2 月号に 3 冊の本を紹介しています。日本にはリーダーがない。リーダーのポジションの人は情けないことに歴史観がない、世界観がない、志が低い、潔さがない、これが問題だということを書いている。そのようなことを書いた本を紹介させていただきました。

今の日本の問題は何かといえば、医療という社会の基本的な基盤、教育、このようなことについてずさんな状況になっています。それは今言ったようにリーダーが、何が問題だという認識がない。その認識のなさは歴史観や世界観がないことに基づくわけですが、もう一つは、どうしたらいいかという戦略がない。それは歴史観がないだけではなく、志の問題、潔さの問題、命をかけるかどうかの問題、さらに世界観がないということにあるということをお話しさせていただきます。

現在の医療については問題が多く、社会的な背景、つまり高齢社会、5 人に 1 人が 65 歳、さらに生活習慣病という 50 年前にはほとんどなかった病気が大勢を占めているにもかかわらず、医療制度は変わらない。そして卒後研修が必修化になって、「まぜる」というプリンシプルを入れた途端に、学生は非常に明るくなっています。今まであった多くの問題、例えば北海道大学、東北大学の金銭問題と過疎地の医師不足という問題が今まであったにもかかわらず、表面化してこなかったのはなぜか。

それが社会的な問題になったというのは、我々が知っていた問題が社会的に広く認識されたということで、その場当たりの手当てをするのではなく、大きな医療制度の改革をする絶好のチャンスなのです。にもかかわらず、厚生労働省は、例えばそういうところに医師を手配するようなポジションをつけて、大学の内科の講師クラスの人を充てたいなんて言う。「そんな継ぎはぎだらけのことをするんじゃなくて、これだけ社会問題になってきているということは、それだけチャンスなんだから、もっと 10 年 20 年先を見据えた大きな政策を出して、国民の意思を動かし、政治を変える、財務省と厚生労働省と財源の取り合いをしていけば厚労省は負ける、そんなばかなことをしちゃいけない」と言ってきたばかりです。

そういう背景で、いま医師会という大事な組織の会長選挙がある。これによって日本の 20 年までの医療政策が大きく命運を決してくるであろうというぐらいの、かなりな危機感がないといかんと思います。

アジアヒーロー

教育も同じです。国立大学も独法化され、国立病院療養所も独法化され、既に交付金がどんどん切られる。財務省が、税収が減ってきたという手前勝手なことでやっているようでは困るわけで、それでは当事者である医療人は何を言っているのか、当事者である教育人たちは何を言っているのか、どこから聞こえてくるのか。当事者たちにあまりにも発言が少ないというところに問題がある。

日本の課題は何かということです。アジアヒーローと言われるぐらい中田（英寿）、イチローというような人たちは世界的なヒーローとして認識されてきているわけです。このヒーローが出てきたのは、9 年前の野茂（英雄）が初めてメジャーリーグに行ったという、1 億 3000 万円の最高給をとっていないながら、日本のプロ野球を 5 年でやめて、メジャーで投げたいと言って規則破りをしました。

しかし野茂が出たということは、20 年前に同じことをやってもそれだけのインパクトはありません。なぜかといえば、BS 放送というライブでテレビで「見せる」という技術があったということです。つまりライブのテレビは評価を一切加えずに、国民一般にそのままを流しているということが大事なんです。事実をありのままに見せているということです。

これを評価できるのはだれでしょうか。一般の国民ではありません。プロ野球の選手です。これに続いて行った人たちが、伊良部（秀樹）であり、長谷川（滋利）であり、そういう人たちが行って、多くの国民がメジャー野球見る機会がふえた。これによって佐々木（主浩）が行って活躍し、さらにその次の年にイチローが行って活躍し、日本人がみんな元気になってきた。自信を持ってきたということがあったわけです。

さらにノーベル賞をもらった日本人が 4 人、3 年続けて出たということも、日本人が元気になった。個人、個人で世界に通用するそれぞれの分野の人がいるかということによって、国民全体の元気が出ることであり、それは決して官僚ではありません。決して肩書で威張っているような人ではないということに気がつかなくてはならないということです。

つまり日本の課題と挑戦は「プロを育てる」、つまり 1 人 1 人がそれぞれの職業で、肩書なしで世界でなんぼのものだということを問われているということです。

野茂の意義をよく考えてみましょう。それではイチローは、1 年目には MVP になって、2 年間続けて首位打者になり、野茂から 9 年目に松井（秀喜）が初めて行きました。ところが去年松井が行ったら、オープン戦から松井のことばかりテレビで出てきます。なぜですか。しかも新聞では、読売新聞なら「松井、イチロー」でもいいんだけど、読売新聞以外でも「松井、イチロー」と書いています。なぜでしょう。

イチローは向こうでも実績があり、2 年間首位打者ですから、当然「イチロー、松井」と書くべきなのに、日本は読売新聞以外でも「松井、イチロー」と書いています。しかも松井のあのインタビューを見ていると、毎日インタビューに答えて、ジェントルマンです。ところが野茂やイチローはあんなことをするかというと、しません。

何であれだけ松井を大事にするのか、テレビでも松井ばかり映して、イチローもつけ足しになってくるわけです。それは日本中が 9 年たって初めて本家の長男が行ったという認識があるということです。本家の長男が行ったから、お母さんたちは心配でしようがないんです。日本中が「過保護ママ」シンドロームになっているということです。そんなことでは元気な人は出てくるはずがないということです。本家の長男か分家の三男かの違いだなんていうことを感じているからよろしくない。

さてそれでは皆さんに伺います。私たちはプロでしょうか。医者というのは一人ひとりでやれる仕事ですが、プロなのか。今日、お祝いに来た人たちは肩書の立派な人たちが多いですが、その人たちは、お医者さんとしてはプロなのか。「肩書がなかったらあなたはなんぼのものか」と言われたときに、胸

を張って答えられますか。そういう人たちを育ててきたんです。それが今、国立大学の独法化についての心配があるわけです。

その底流にあるのは何かということです。この元気がないのはすべて大きな組織、官尊民卑がいいとみんなが思っていたからです。私は医学界や大学人たちについてはたくさん発言しています。しかしそれだけでは済まない。つまりより広い人たちに知ってもらおうと思って、講演の機会があるたびに断らないようにしていますし、ホームページ、私の名前を入れて search してくださればいいんですが、< www.kiyoshikurokawa.com > に私の講演とか、ニュースとか、コラムとか、いろんなことが出ています。ぜひ訪ねていただければと思います。さらに訪ねていいと思ったら、周りの人に教えてあげてください。特に患者さんにも教えてあげてください。それによってまたいろんなご意見ももらえる。たくさんの記事が出ていますので、さらにキーワードを入れると search ができるようになっています。よろしくお願いします。

グローバリゼーション

さて今のキーワードは何かというと、「グローバリゼーション」です。このグローバリゼーションは何かといえば次のようなことです。つまりこの 20 年、交通と情報の手段が極端に発達してしまったから、モノ、ヒト、カネが世界中、国境を超えて動く。日本では何人ぐらいがインターネットにアクセスしているかということ、最近の情報では大体 8000 万人、つまり 3 分の 2 の人がインターネットへアクセスするようになったということです。

これができるようになったのは、日本の人がみんなコンピュータが好きになったからではありません。これは実を言うと数年前にちょっと規制緩和をしたために、ヤフーがつなぎっ放しで 1 ヶ月 3000 円というサービスを出したからです。つまり日本は森首相のとき、IT 化といっているいろいろ予算をつけましたが、そんなことうまくいくわけではないんです。なぜかわかりますか。つまりそれまでは、日本がインターネットへアクセスできない理由は、すべて NTT の回線につながらなくちゃならなくて、それが高いからです。

つまり 24 時間つなぎっ放しで 1 ヶ月 3000 円となれば、広がるわけです。つまり IT の情報を、みんながユーザーになるためには、機械を売るなんていう産業に補助金をやっていちゃだめなのであって、NTT の雇用対策にお金を使えばいいんです。そうすれば安くなるんです。ちょっと規制緩和してヤフーが乗り込んできたので、NTT はフレッツと安いサービスをすぐ出してきました。つまり官業がこういうことをやっているから生活コストが高くなるということです。つまりライブで映像が世界じゅうに配信されているということです。

ところでさっきのメジャーリーグで、BS だと言いましたが、BS はご存じのように官製です。これは特殊法人で、政府が議会で予算を決め、決算を承認するところです。会長は海老沢さんです。政治部の人がなるということは、何を意味しているかということも考えてください。

さて日本は経済大国になり、1 年に 1800 万人の人が外国へ行き、皆さんが外国のことを見、直接聞くようになる。本質はわからないかもしれないけど「違うな」ということを感じる。さらにインターネットで情報がどんどん拡大して、1994 年にジム・クラークという人が、アンドリーセン（マーク・アンドリーセン）というシカゴの学生のアイデアに投資をして、ネットスケープという新しい会社ができて、インターネットのアクセスがしやすくなったというのはたった 10 年前です。それでインフラが安くなればあっという間にみんながこれを使うようになり、情報が共通になる。

つまり例えばリンカーン大統領のことを調べてみようとする、図書館に行かないで、うちでもいろいろなことがクリックで見られる。すばらしい時代です。使うか、使わないかでは大きな差が出るし、使ったことをどう生かすかというのも大きな差が出るということです。

つまり情報がこれだけ開かれて、皆さんが実際に外国へ行ったり、外国から 500 万人の人が毎年来たりすると、「日本とは何か違うんじゃないの」ということを皆気がつきだしたということです。となると、今までの権威に対する疑問がいろいろ出てくるということです。

皆さん覚えているでしょう。平成元年ごろはバブルのピークで、1989 年、日経の株価が 3 万 9000 円の最高値になった年です。翌年にはもう 2 万円台になっていますが、そのころには『ジャパン・アズ・ナンバーワン』というベストセラーが出ていました。その秘密はどこにあるかという、「政・産・官の鉄のトライアングル」と言われていました。だれも文句言っていなかった。

そのとき私は田邊君と書いた『医を語る』に、「政・産・官の鉄のトライアングル」なんて全くいい加減だ、その中に「学」という言葉がないような国は単なる成り金で、金がなくなったらだれも魅力を感じないということを書きました。今になってみんな「政・産・官」じゃなくて「産・官・学」の何とかなんて言っていますが、とんでもないと言ってなくてはいけないのです。

つまり、権威への疑問がたくさん出てきました。権威の一つのターゲットは医師会であり、お医者さんであったから、医療事故だとお医者さんなんて言っているけど、とんでもない。お医者さんの場合は、個人的に事故が起こったのはあの先生だと言えるから。医療事故だって、手術をすればどのぐらいのリスクがあるかというのはあります。お医者さんのほうにもたくさんすることがあります。外科であれば、それだけの腕になるような人を提供しなくちゃいけない。それが今まではすべて医局の理屈で動いていたというだけの話です。それを自分たちで直すのが私たちの責任です。しかし「医者がけしからん」なんて言われたら、反論することもたくさんあります。

それじゃ銀行員はどうするんですか。不良債権を 200 兆も抱えて何もしない。しかも会長も社長も 1 人もやめない。じゃあ東電はどうするんですか。日本ハムはどうするんですか。雪印はどうするんですか。「ふざけるな」と言わなくちゃいけません。医者だけじゃないよと。

しかもその「政・産・官の鉄のトライアングル」と言われていた後に文部省の事務次官はリクルート事件で有罪になり、厚生省の元事務次官は、事務次官室で 6000 万をもらって有罪になり、まさか財務省と思ったら、これもスキャンダルまみれ。何を言っているんだということをもっと言うべきです。

それがもっと明らかになったのは、瀋陽の事件です。瀋陽の日本領事館に北朝鮮から逃げ込んだ人たちは、あのビデオテープがなかったら、どうなったと思いますか。そういううわさがあったけど、という国会の審議でおしまいです。外務省は自分たちを守ることが一番先だから、国を守ろうなんて気概はありません。ということでビデオテープが配信されたので、これを前提にして国会でも川口外務大臣が答弁をするという羽目になったということです。そのときの国会答弁も全部インターネットで見られるようになっています。

しかし問題は、同じテレビの画像が CNN その他で世界中に配信されているということです。つまり世界中の人がこれを見たということです。これを見られて、日本という国はどういうふうに使われたでしょうか。しかもそのときの国会答弁やマスコミの扱いは世界中に配信されています。みんなが知らないと思ったら、世界の人は結構見えています。ということに気がついているかということです。

その後のあの 5 人の脱北者に対する扱いの日本と中国のやりとりを、世界中が、注目している人は見ているということです。それをどれだけの日本人が気づいているでしょうか。中国と日本が交渉して、日本は元の状況に直せと言っていました。中国が、あの 5 人はフィリピン経由で韓国に行かせたと言ったら、それきり日本は何もできない。そういうやりとりをしていると、日本は問題の本質を突いてこ

い国だ、という話で、国の信用がだんだん低下しているということです。

つまりこれは脱北者の人権問題ではありません。ジュネーブ条約ですが、国の領土を侵されたところと一番の問題がある。それについては絶対引かないという態度が出てこないと日本がなめられるということです。そういうことが重なると、国の信用がなくなるということです。

そういうグローバルゼーションというのは何かというと、世界中の人がいろんなことを見て知っている。その本質はわからないけど。つまりメジャーリーグと日本の野球は何が違うのかということは、普通の人はわからないかもしれないけど、その本質は何かということを知り、それを直していく政策を考え、実践するというのがリーダーの役割だということです。

さてそこで、国際化とは一体何か。例えば『レクサスとオリーブの木』、トーマス・フリードマンというニューヨーク・タイムスの記者が書いたすばらしい本です。幾つも本がありますが私の講演にもこれは紹介してあります。

その後の 9・11 が起こりますが、小室直樹の『イスラム原論』とか、サミュエル・ハンチントンの『文明の衝突』。それぞれ正解ではなくて一つのセオリーですが、少なくともそういうものを読んでみる。それによって自分たちの歴史観と世界観を考えてみるということが大事であるということです。

責任ある立場の人たちが、どれだけ日本の近代史を学び、「日本の常識」はしばしば「世界の非常識」ということもあるということを知った上で、しかも日本の歴史を知った上で、日本の常識のゆえんを考えて、発言し、政策を実行していくのが大事だと思います。

科学と技術の歴史

そこで日本は一体どうだったのだろうか。去年はある意味では日本にとっては大きな意味のある年でした。ちょうど徳川が全国統一して、江戸を首府にしたというのが 400 年前でした。それから 250 年鎖国をしたというのが、日本人の常識の形成にある意味があり、日本を非常に豊かな国にしたということも確かです。16 世紀の中頃、1549 年にフランシスコ・ザビエルが日本に初めてやってきました。その 10 年後にルイス・アルメイダが来て初めて別府にカレジオをつくり、西洋近代医学を日本に紹介しました。そのころ世界は「大航海の時代」に入っていたことを示します。つまりコロンブスのアメリカ大陸発見、その他のことがあり、大航海ができる時代になったということです。

その時代に鎖国をしたというのは、徳川家康としては自分の権力を維持するためには非常にいい政策です。もちろん今の北朝鮮とか、1 年前までのイラクもそうです。いかに国民に情報を与えないかというのは、権力者としては最良の武器です。しかしそういうことがあって、150 年後にペリーが来て日本に開国を迫る。その理由は帝国主義、植民地主義というのが世界を動かしているパラダイムだったということです。

つまり 200 年前に産業革命が起こり、20 世紀の特徴は何かといえば、ずっと世界戦争があったということが一つの特徴です。つまり第一次大戦、第二次大戦があり、それが終わったら冷戦構造になり、1989 年にベルリンの壁が崩壊し、91 年にソ連邦の崩壊を迎えた。常に世界戦争があったということは、それだけ世界中の人が何らかの形で戦争の枠組みに取り込まれていたということです。そういう世界的枠組みの認識が大事です。

それからもう一つは科学技術の進歩がすごかったということです。例えばテレビのライブの中継で野茂の活躍を見せると、これは後でのビデオのニュースとは全然違うインパクトがあるという意味です。今はテレビでみんなライブで見っていますが、日本に初めて人工衛星を通じた、太平洋を越えたテレビの

中継があったのは 1963 年です。11 月 23 日で、アメリカから初めて衛星を使ったテレビのライブが、もちろんカラーテレビはありませんが、いよいよあるぞとみんなが待っていた最初のニュースはケネディ大統領の暗殺でした。それが起こったのが 40 年前です。ということで、1969 年にアポロの月面着陸もライブで放送されました。覚えておられる方が多いと思いますが、本当にうまくいくかどうかともわからないのにライブで中継したというこの自信、それからその技術に対するセーフティーの問題。そういう時代であったということです。

このような科学技術の進歩というのは、実は世界大戦があったということと密接に関係したことであるという認識が大事です。

例えば、来年ちょうど 100 年を迎えますが、アインシュタインが相対性理論を発表します。そのとき何人がこんな論文を読んだでしょうか。どれだけ引用されたでしょうか。インパクトファクターとかサイテーション (citation) なんて、こんなことは単なる一つの指標で、本当のサイエンスの意味をどれだけサイエンスをやっている人が認識しているかを問われるようになるということです。

つまりアインシュタインが相対性理論を見つけ、「 $E = mc^2$ 」を出して 40 年後に原子爆弾が開発され、日本に 2 発落ちた。ドイツは開発に失敗した。さらに現在の日本の電気の 30% は原子力発電です。

つまり、科学と技術がすごい勢いで発達しますが、それはあくまでも世界戦争があったために、科学的発見に国がより強い武器をつくるために投資をしたからです。科研費で、ピア・レビューでやっていたら、こんなものできません。これに国が投資をするというのは世界戦争があったからです。これを民生のために投資する政府なんてどこにありますか。ということがあったということをお記憶していただきたい。

次には、ライト兄弟が世界史で初めて動力を使って飛行機を飛ばします。ライト兄弟は自転車屋さんです。ちょうど去年の 12 月 17 日、100 年前のことです。これで最初 12 秒間、36 メートル飛んだわけですが、その 66 年後には人が月に歩いているというぐらい進歩するのはなぜか、すぐに国が投資をして飛行機をつくるからです。

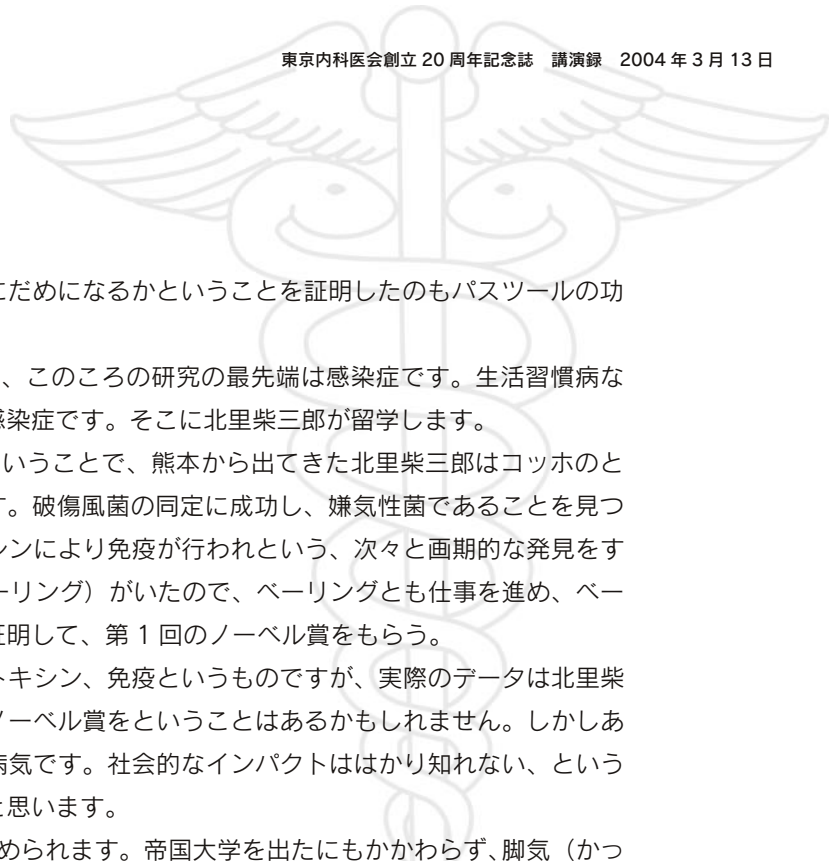
世界戦争があったからこそ、国はより強い武器をつくるために投資し、ライト兄弟の 10 年後の第一次世界大戦では飛行機が飛んでいます。そのまた 30 年後の第二次世界大戦は空中戦になった。戦争の様相が変わったわけです。今やイラク、アフガニスタンで、プレディター (Predator・無人偵察機) なんて人が乗っていない飛行機で爆撃するというぐらい進んでいる。

20 世紀の科学と技術の進歩はすばらしかったが、それは世界大戦という世界的なフレームがあったということをお認識する必要があるということです。

感染症の克服

さてそこで医学です。医学は常に科学とはまた違った面の、大事な人間のチャレンジです。なぜかといえば、子供が早く死ぬのはかわいそう、死にたくないということはある。しかし 100 年前までは、みんな恐れていたのは感染症です。糖尿病ではありません。あつという間に感染症、わけのわからないもので、15 世紀にはヨーロッパでは 3000 万の人口がいましたが、ペストでたった 5 年間で 3 分の 1 の人が死んでしまった。子供にペストの症状が出たら家族もみんな逃げるといぐらい恐れられていた。これが感染症です。すべては感染症を中心にして人間は苦労してきました。

ジェンナーの種痘 (1795 年) から始まり、予防接種になったなんていうのはごく最近の話であって、近代医学を築いたいろんな人がいます。パスツールは感染症のいろいろなことを見つけました。ワイン



もフランスの名産ですが、ワインがなぜすぐにだめになるかということを実証したのもパスツールの功績です。

次はベルリンのコッホ（ロベルト・コッホ）、このころの研究の最先端は感染症です。生活習慣病なんかではありません。みんながばたばた死ぬ感染症です。そこに北里柴三郎が留学します。

北里柴三郎はちょうど去年で生誕 150 年ということで、熊本から出てきた北里柴三郎はコッホのところに行き、5 年間で多くの業績をあげます。破傷風菌の同定に成功し、嫌気性菌であることを見つけ、さらにこれがトキシンを出し、このトキシンにより免疫が行われという、次々と画期的な発見をする。一緒にベーリング（エミール・フォン・ベーリング）がいたので、ベーリングとも仕事を進め、ベーリングはその後、百日咳について同じことを証明して、第 1 回のノーベル賞をもらう。

ベーリングと北里の最初の論文は、細菌、トキシン、免疫というものですが、実際のデータは北里柴三郎の破傷風菌のデータです。北里柴三郎がノーベル賞をとることはあるかもしれませんが。しかしあのころのジフテリアといえば子供が沢山死ぬ病気です。社会的なインパクトははかり知れない、ということの一つの評価点にするのもやむを得ないと思います。

北里柴三郎は帰国して、東京帝国大学にいじめられます。帝国大学を出たにもかかわらず、脚気（かけ）ということについて反論したものだから、いじめに遭います。そんなに世界的な有名な学者に、とって援助したのが偉大な福沢諭吉です。福沢諭吉によって今の東大の医科研ができて、結核の療養所をつくります。100 年前は世界じゅうで死因の 7 人に 1 人が結核だったのです。コッホはツベルクリンも発見します。

私たちの世代はほとんどの人が結核になっている。私も小さいときに結核で胸水が出たりして、ほとんど死んでいた。今の私たちの上の世代はかなり若いときに結核で亡くなっている人が多い。そういう時代だった。100 年前にまだ結核の薬なんかなかった。

次に志賀潔が北里柴三郎のところで仕事をして、赤痢菌を見つけます。さらに野口英世も北里柴三郎のところへ行って、1900 年に若干 26 歳で渡米し、フレクスナーのラボに行く。フレクスナーは 1904 年にいよいよ新興国アメリカが医学研究に乗り込むぞというロックフェラー研究所に初代所長として呼ばれ、自分のグループから野口英世ひとり連れていきます。

そこで野口英世はその 10 年後、脳梅毒はスピロヘータのせいだということを実見し、世界中をあつと言わせます。そのころは脳梅毒はスピロヘータのせいだなんてわかりませんから、みんな精神病棟に送り込まれていたという時代、秦佐八郎が見つけたサルバルサンがあって、それで劇的に回復するということになる。

つまりそういう 100 年前には、あんなにお金がない日本に、これだけの世界的な功績を残した志の高い、熱い心の日本人がたくさんいたことを、特に若い人に言いたいのです。今のロックフェラー大学の図書館の真ん中には野口英世の胸像が建っています。ロックフェラー大学といえば今や世界的な有名な研究大学ですが、その歴史を見ると、サイモン・フレクスナーとヒデオ・ノグチという 2 人の名前がまず出てきます。というぐらい 100 年前の日本人は世界に大きな貢献をしています。

臨床家も同じです。「田原の結節」、そして心臓の伝導系も示しました。橋本の甲状腺炎、高安の大動脈炎、みんな 100 年前の仕事です。今でも世界に名前が使われるぐらいの人たちが出ています。今のよう科研費をたくさんつかい、たくさんの方が大学で研究をしていますが、100 年後にこれだけ金を使って何人の名前が残っているだろう。こういう人を伸ばすシステムが大事です。

感染症の克服は種痘という 200 年前のジェンナー、それから血清療法、ペニシリン、ストレプトマイシンが見つかる。両方とも見つけた人たちはノーベル賞を 1946 年と 52 年にもらっています。これでこの 50 年で感染症の原因がわかり、治療もできるようになった。ワクチンができるようになったと

いうのは 100 年前には考えられないことです。たった 100 年です。このぐらい世の中が変わったということです。というわけで 20 世紀の間に、公衆衛生、上水・下水道を分けようということが 100 年前日本でも行われる。長崎で、コレラが出るとあつという間に 1000 人死ぬぐらいの、100 年前の日本だったということです。

明治維新のリーダーたち

世界の人口は 100 年で 16 億人から 63 億人と、人口の大爆発が起こる。ちょうど 150 年前にペリーが来た。そのときの世界の枠組みは何かというと、植民地による領土拡大というのが国の力の基本だったという経済原則があるからです。そこでペリーが来る。その後明治維新になる。

つまり今の日本の状況は、明治維新の前の江戸幕府の末期の 10 年ぐらいの状況ではないかというのが私の考えです。つまり大老、家老が毎日評定会議をして「ああでもない、こうでもない」と言って先延ばしにしているうちに、周りの世界がどんどん変わって、ぱーんと世の中が変わってしまうということです。

明治維新になったときのリーダーはだれたちかといえば、伊藤博文、井上馨、福沢諭吉、坂本竜馬のようなみんな若干 30 前後の人たちが次の日本を築くために、列強に植民地化されないために命をかけていることをしました。

この人たちの心の支え、考え方の支えとなった人は吉田松陰です。吉田松陰は 29 歳で死んでいます。しかも最後の 1 年は牢獄にいたわけで、松下村塾でこういう若い人たち、15 ~ 16 歳の人たちと接して、一緒に勉強しようと言ったのはたった 1 年半の間です。その間に次の世代を背負っていくいろんな人たちがそこから出てきた。私がいろんなところで話すときに、あのときの吉田松陰のような人たちが今にいるのか。29 歳で死んでいる。もっと若い人元気を出せよと言っているのです。福沢諭吉もすばらしいし、慶応義塾を慶応 4 年につくる。

列強が攻め込んできます。日清戦争も 3 回衝突して 3 回目に勝つわけですが、その後に日露戦争に突入するということです。日露戦争に日本が勝つなんてだれも思っていないが、アメリカとイギリスが応援している立場があるわけです。それはヨーロッパの政治の状況です。

司馬遼太郎の『坂の上の雲』。今年は日露戦争開戦 100 年ということで、いろいろなイベントが組まれると思います。日露戦争は秋山兄弟という陸軍、海軍の両方の参謀、リーダーがいます。司馬遼太郎は近代日本の語り部と思いますが、『坂の上の雲』以降は、人物を中心にしたストーリーは書いていません。街道物語（『街道を行く』）になってきます。

司馬遼太郎は今の日本をつくったいろいろな人たちのことを書き残したいと思っいろいろ調べた。だけどこの秋山兄弟、つまり日露戦争に勝利した後の日本には、後世に書き残すような人はいないということに気がついたのです。

朝河貫一は明治 6 年福島県の生まれで、東京専門学校（後の早稲田大学）を卒業し、非常に貧乏だったのですが、ダートマス大学を卒業し、エール大学の大学院に学び、ダートマス大学でしばらく教えた後、エール大学に移り、日本人で初めてのアメリカの大学の教授になった人です。

その人が日本とロシアの衝突、さらにその後一つだけ日本語で書いた『日本の禍機』。これを私は JR 東海の「WEDGE」2 月号の読書漫遊で紹介しています。読んでいただければと思います。そういう人たちがあそこにはいた。日本に苦言を呈する。本当に胸を打たれることが書いてあります。

さて明治の時代は東洋・西洋医学のせめぎ合い、それまで御殿医は東洋医学ですが、西洋医学が勝つ

ということが起こりますが、それを一番端的に示したのが種痘です。

天然痘は子供がみんな 1 回はなります。死亡率は 40% 程度です。1 回なれば二度となりません。ジェンナーが 200 年前に見つけたわけですが、その種痘をやろうと言ったのが、出島に近かった佐賀藩です。これはもちろん佐賀藩の藩主があればうちの子供にもやるべしといって命じて、そのころの榎林（蘭法）、相良（知安）という人たちが佐賀藩で種痘をする。

その後、笠原良策については吉村昭の『雪の花』を見ていただければと思います。種痘所が長崎ででき、長崎大学のもとになり、福井から金沢へ、三つ目がお玉が池ですが、これらが官立、つまり政府公認、いかに西洋医学が優れているかを示した。非常にドラマティックなエフェクト（effect）を見せて、西洋医学になり、これが近代の日本の大学のもとになる。

新しい医学はドイツ式ということが政治的に決まります。そのときにもう 1 人の偉人が高木兼寛です。慈恵医科大学をつくった人ですが、『白い航跡』（吉村昭著）を読んでいただければわかります。明治の帝国大学ができたころの日本の大きな風土病と言われたものに脚気があります。脚気菌があるということで日本人たちはたくさん研究しました。高木兼寛はセント・トーマスから帰り、イギリスの実践的な医学教育を学び、臨床疫学的に風土病ではなくて栄養に違いないと、パン食に注目し、麦のせいで、白米がよくないと、海軍の軍医でしたから、軍艦を使って世界で初めてのコントロール・スタディをし、これは白米がよくないということを証明します。

しかし帝国大学派にはボコスカにやられます。その中心は森鷗外（森林太郎）です。陸軍の軍医の森林太郎は最後は自分のとんでもないミスに気がついたのではと思いますが、森鷗外の墓というのはありません。三鷹の禅林寺に森林太郎の墓はあります。一言だけ森林太郎の墓ということが書いてあって、すべての栄誉その他は一切いただきたくないと言を残している。森林太郎はすばらしい秀才だったわけですが、それが心の傷に残っていたに違いないと推測されます。

なぜか、日露戦争は 100 年前ですが、陸軍の軍医として陸軍の死亡者の半分以上が脚気で死んでいる。しかし高木兼寛の海軍は、東郷平八郎、秋山真之参謀ですが、海軍では脚気で死んだ人は 1 人もいません。森林太郎は後々まで非常にそれを苦しめられたろうということは想像に余りあります。

そういうわけで、医学の進歩については 20 世紀の最初の年、1901 年から始まったノーベル賞をどんな人がもらったかということを見れば、感染症がメジャーな問題だということがよくわかります。

第 1 回は先ほど言ったジフテリアのベーリング、第 2 回はマラリアの原虫が血中にいるということを見つけたロナルド・ロス、さらにコッホの結核、コッホはもちろん北里、ベーリングの先生ですが、ツベルクリンを見つけ、近代細菌学のもとをつくった人です。

チャールス・ラブランがマラリアについて、メチニコフと、エールリヒによる免疫、さらにフレミングがペニシリンを見つけ、ワクスマンのストレプトマイシンです。感染症については私たちはかなり理解した。予防接種ができ、抗生物質ができ、これをまた使い過ぎということもあるわけですが、ということになってきたのです。

さて第二次大戦で日本は、古ぼけたドイツ式の医学教育と言われながら何も変わらなかった。これが最近になって情報がだんだん広がり、医学教育、卒後臨床研修の必修化。何でこんなことが起こってきたかといえば、情報化の時代で、社会が何かおかしいと考え出しているわけです。先ほどのメジャーリーグのベースボールと同じで、社会は何かおかしいんだけど、何がおかしいのかわからない。それを知っているのは私たち、医者です。

それでは医学界は医学教育がここまで追い詰められるのに何もしなかったのか。医局講座制とかいろんなことを言っているけど、自分たちの都合です。じゃあ卒後研修はどうなのか。卒業したときに医師免許を与えられて、それまで医師免許に値するだけの卒業生をつくっていますか。それは医学界の問題

です。それを解決しなかったのは医学界の責任です。医師会の悪口を言う人はたくさんいます。しかし医学界に医師会の悪口を言うような資格があると思いますか。

私は去年の 4 月の医学会総会で言いました。東海大学が医局廃止した、「すごいね」なんていわれました。しかし、知っていてやらないのはだれのせいだ。医師会の悪口を言う人はたくさんいます。医師会にもいろんな問題がある。だけど医学界に医師会の悪口を言う資格なんかない。そんなものは「目くそ鼻くそ」のたぐいだと言いました。外から見たらちゃんちゃらおかしい。むしろ医師会にみんなが力を結集して、これからの医療制度、医師の専門医制度、医者教育制度すべてを医師会に結集して、社会に責任を果たすことこそ、我々の責任だ、と話したわけです。

戦後の日本

さて戦後の日本はどうだったか。ピューリツァー賞を受賞したジョン・ダワーの『Embracing Defeat (敗北を抱きしめて)』、これも JR 東海の「WEDGE」に書いてありますので、読んでいただければと思います。

戦後の日本、いろんなことが起こりました。戦後の日本にペニシリンも来て、みんな「救われた」なんて言っていますが、あれは戦後日本にきた GI に淋病と梅毒が広がったから緊急に輸入しただけの話です。日本人を救うためではありません。

第二次大戦後の日本は素晴らしい経済成長を遂げましたが、それはアメリカに占領されたという、全く日本に関係ない幸運があったということと、冷戦構造になったということがあったからです。それによって 5 年間日本は貧乏だったわけですが、アメリカに占領されなかったら今ごろどうなっていたか。しかもアメリカの占領政策によっては今の朝鮮半島みたいな状況になった可能性も高い。実際スターリンは北海道のほうに来るといって兵隊を進めていました。だからアメリカが日本と朝鮮半島にとった政策の違いというのが、日本には非常にラッキーだったということをもっと認識すべきです。

しかもその 5 年後に朝鮮半島で戦争が起こり、それで最初に追い込まれましたが、仁川（インチョン）上陸戦争で平壤（ピョンヤン）まで押し込んで、ちょうどその 1 年前に中国では国民党と共産党の戦いが終わり、共産党が勝っていたので、そのときに赤軍の正規軍 60 万が投入されます。それで 38 度線まで押し戻し、3 年間朝鮮戦争が続いた間に 200 万の人が死に、結局南北に分かれ、その 3 年間の戦争で日本は米軍と国連軍の後方基地として一気に経済復興を果たしたということです。

日本人はみんなまじめでよく働く、よく上の人の言うことを聞く。だから日米安保と冷戦のヒートアップによって日本は一気に経済復興します。という枠組みがあったということを考えないと。普通の日本人の性格と素質がよかつたんです。リーダーはどうってことないのです。

戦後自分を捨ててまで頑張ったリーダーがどこにいます。「政・産・官の鉄のトライアングル」なんて言って、厚生省、文部省、外務省、大蔵省、県警もスキヤングルまみれでしょう。その原因は終身雇用、年功序列、大きな退職金という内向きな精神構造を構造し、しかもリーダーはビジョンが欠如していた。みなサラリーマンと官僚です。大きな枠組みは日米安保でアメリカが政策を決めていた。歴史観も世界観も培われず、リーダーになる人は高い偏差値の大学に入れば、そこからは勉強しなくてよかった。違いますか、先生たちだって、国家試験に受かればいいんだよ、うちの医局に入れよと言われていませんでしたか。そんなものです。

今になって経済界の人が、大学教育が不満だとか、専門教育が足りないと言います。しかし、私たちが大学へ行ったところは 10%しか行ってないんです。私は産業界のリーダーに「うんと勉強しろなんて言われた記憶はあるの？」と言いました。そんな認識もなくて今の教育に文句言える資格があるのかと

いう話です。

福沢諭吉とかルース・ベネディクト、池上英子さんの本などを読まれると、どうして日本人はこういうことを考えるのか、どうしてこれが日本人の常識なのかということを知ることができるようになるということでご紹介させていただきます。

20 世紀は世界戦争、サイエンスとテクノロジーがものすごく進みました。サイエンスはだんだん進みますが、テクノロジーと両方が進んだからこそ、50 年前に DNA の二重らせん構造がわかったら、50 年後にはヒトゲノムの塩基配列まで全部読まれた。コンピュータが発達し、オートアナライザーが発達し、マイクロ化が発達したからです。そのゲノム塩基配列を読んでも、人間とチンパンジーは 1.2%しか違わない。人間とバナナも 50%しか違わない。もうちょっと人間も謙虚になるべきじゃないだろうかと考えます。

21 世紀の課題

それでは新しい 21 世紀は何かと。63 億の人がこれから 50 年すると 90 億になると予測されています。しかもその人たちのうちの現在の 80%は未開発国が開発途上国にいる。もちろん人間がふえればエネルギーを使い、物を消費し、物を捨て、働く場所がどんどん広がって、環境がどんどん壊れていきます。世界の 63 億人の 50%がいま都会に住んでいます。都会の問題は何でしょうか。90 億になったときには 70%が都会に住むと言われていています。

このような世の中で、何をしていたらいいかということをもっと考えなくてははいけません。環境をどうするか。できない理由なんて聞きたくない。どうやったらできるかということです。南北の格差がどんどん広がり、情報が広がっているためにいろんな不満が出てきて、今のようなイラクの戦争もそうですが、非常に不安定な状態。世界の武器の 40%はアメリカが持っています。アメリカはさらにインベストする。軍事力でアメリカに勝てることはありません。

じゃあアメリカはどうするか。1 年前はアメリカには勝てないというあきらめムードがありましたが、1 年したらどうなったと思います。今やあのイラクの参戦にソ連が反対し、中国が反対し、フランスが反対し、ドイツが反対し、という話で今や「アメリカもいい加減な国だな」と、何となく世界じゅうがそんなムードになっている。

つまりアメリカに圧倒的にやられちゃうということではない。ブレアは 1 カ月前にドイツのシュレーダー、フランスのシラクと三者会談をしています。つまりアメリカはソフトパワーを売らない限り、しかも戦争に行くのであればレジティマシー (legitimacy) が無い限り、支持されない。世の中はたった 1 年でこんなに動いている。アメリカはソフトパワーというのが非常に大事だということをジョセフ・ナイも書いていますが (『アメリカへの警告』など)、そういう時代になっているのです。日本からはこれからは何かというと、「学術の動向」等々書いていますから、読んでください。

教育の問題

そこで最後の三つだけ。今、教育が大事だと言われています。どの国でもただで与えられている資源は国民と空気しかありません。したがって人をどうやって育てていくかということこそが、これからの

国の命運を決めるということです。明治維新のときもそうです。教育にたくさんのお金をつぎ込んだ。官僚的ではない教育制度を入れるというのが非常に大事です。

これはリーダーの問題です。世の中には偉い人がたくさんいるものだなと思います。歴史的に。チャーチル、1950 年、第二次大戦が終わった後です。あのころもいよいよ近代工業国家になるというので、大学でエンジニアを沢山作るということが政策として出ています。しかしチャーチルは言います。「大学の義務は何かというと、知恵 (wisdom) を付与することであって、商売じゃない。人格の形成だ、技術じゃない。」と言っています。立派なものではありませんか。

今の日本にそんなリーダーはいますか。産学連携とか、すぐに何とかかんとかと言うけど、冗談じゃない。当時は工業化していきますから、チャーチルは「イギリスもたくさんエンジニアが必要だ。だけどエンジニアの国なんかつくりたくない。」と。大学は人材の育成をし、基礎研究をする。それが役に立つかどうかは大学の先生の duty じゃありません。産業界が来て一生懸命仕事をすればいいんです。

科学と技術の政策は何か。日本は世界で冠たる第 2 の GDP です。500 兆円、借金まみれですけど。ルーズベルト大統領も言っています。「科学技術政策は何か。経済を救うためじゃありません。我々の世界の進歩は、豊かな国にさらに物を与えようということじゃない。豊かな国は余り持っていないところにどれだけのものを提供してあげるかということが、我々の政策として試されるのだ」と。立派だと思いませんか。そんなリーダーが今いますか、世界第 2 の GDP だというのに。

ノーベル賞 100 周年で、スウェーデンのカール 16 世グスタフ国王のことばです。現在の教育のことを言っています。先生たちのお子さんとかお孫さん、見てごらんください。生まれたばかりで、ものすごい可能性を秘めていて、目がきらきらしています。brain から外を見ている。「その子供は何か詰め込む器じゃない。そうじゃなくて、いろんな可能性に火をつけて燃やしてあげよう、これが教育だ」。これが creativity 創造性だということを国王が言っています。どうですか。教育しっかりしろとか、システムだとか、社会貢献だとか、ばかなことを言うなど。子供はすごい可能性があるんだから、大人が変な口を出すというのが大事なことです。

医師会に力を結集

というわけで、今の日本に欠けているのは何か。歴史が大きくなうねりで流れています。それはなぜかということを見なくちゃいけない。そのためには歴史を知ること。どうやって我々はここに来たか、そのときの世界を囲んでいる状況は何か、そのとき自分たちの国を囲んでいる状況は何かという、大きなうねりを見る。これがリーダーとしては大事です。そのうねりの上のさざ波で、ちょっと株が上がったとか下がったで、すぐに何か介入したりして、もう今年だけで 10 兆使ったという。アメリカの国債を買って、売れないんだから、そういうことに対応する日本のリーダーたち。

医師会はどうか。さっき言ったように、医療の政策、医療の提供、医師の教育、研究、すべてこれは医者の社会的責任です。では医者の責任はどこまでまとめて社会に対応するのか。これは医師会しかありません。医師会にも問題があります。しかし医師会こそが一番重要なんです。

ほかの団体を見てごらんください。土木建築業界、銀行協会、すべて「政・産・官の鉄のトライアングル」の政府のパートナーの護送船団の仲間ではなかったか。医師会だけが唯一そこから外れて、拮抗して、社会のためにやるという歴史があったんです。北里柴三郎が医師会をつくったのは 1916 年です。その伝統をどう生かして医師会に力を結集して、医療の政策、医師の教育、専門医の内容、標榜科、すべてこれは医師会に力を結集して医師がやる使命がある。そこへ行くのに日本内科医会、内科学会、い

ろんなところが一致団結しない限り、これでは日本の医療は荒廃します。

消費税が 10% になったらどうするんですか。医療政策はどう変えるんですか。これは厚生労働省がすることではありません。政治がすることです。政治が決めることは国民が決めることです。国民にそういう情報を提供するのはいだれですか。医師会です。それをしないで、これから医療がよくなるなんていうことは考えられません。

ほかの業界団体は一致団結します。何で医者はずぐに分裂したがるんですか。それは一人ひとりが差し当たって食うのには困らないからだろうと私は思っています。だからわがままなんです。大義を追求すべきリーダーを育て、医師としての社会的責任を果たすのであれば、どう力を結集するかが大事です。医師会にも問題がありますが、医師会の機能強化は極めて大事です。それはみんなが支援することです。

それについても今度の医師会会長選挙は、お医者さん全体の命運をかける大勝負になると私は見えています。どうもありがとうございました。